平成３０年度　第１回豊田市生涯学習審議会　会議録

■日時　　平成３０年１０月２４日（水）　午後３時～午後５時
■場所　　市役所南庁舎５階　南５２会議室
■出席者　[豊田市生涯学習審議会委員]（敬称略）
　　小木曽祐子、加納勝彦、坂本耕二、鈴木覚、鈴木正和、土井幸治
　　中田繁美、西原香保里、牧野篤、湊裕、山村史子
■欠席者　杉山浩子
■事務局　生涯活躍部　　田中茂樹、辻邦惠
　　市民活躍支援課　勝野二徹、松井俊幸、宮川恭子、伊達彩乃

次第
１　開会
２　生涯活躍部長あいさつ
３　委員自己紹介
４　正副会長選出
５　議事
　　豊田市の高齢者の活躍支援について
６　閉会

■委員自己紹介　一人ずつ自己紹介

■正副会長選出　会長に牧野篤委員を選任
　　副会長に西原香保里委員を選任

■議事　　豊田市の高齢者の活躍支援について
●事務局　資料に基づいて説明

【 委員意見 】（要約）

○Ａ委員　　華々しく目立つような功績や実績を残すというよりは、むしろ本人のライフスタイルに合わせて、本人が満足できるような生活をしているということを「高齢者の活躍」と定義したいという事務局案。
　ただ、会議を進めるにあたり、少し不安に感じるのは、議論が拡散してしまい、言いっぱなしになってしまうということがある。
　テーマの中心になるものとして、事務局で何か考えはあるか。

●事務局　　活躍のあり方は人それぞれであると考えている。いったんは広く定義した上で、行政はどこの部分をどう支援していったらいいかを議論していきたい。

○Ａ委員　　高齢者の主体性という点について、概念の整理をしておきたい。

〇Ｂ委員　　平成１７年に合併した ６ 町村を考えたときに、それぞれ特色があるまちづくりをしている。地域のなりたちや元々のつながりなどによって、地域ごとにかなり違うと思う。
　中学校区、交流館は２８ある。交流館の中には、支所機能を持った場所もある。行政が地域ごとに高齢者クラブ等で意見を吸い上げて、この地区の高齢者は何を要求しているのか、どのようなことの情報提供を求めているのかという意見から案を出していけないか。生きがいを活躍と捉えるなら、そこから始めることも大事かと思う。
　自分自身も当事者になっていくということを考えた時に、自分が今までやってきたことばかりではいけないと思っている。
　もう一つは、高齢者の中にはあまり出しゃばりたくないという人もいる。一方、出すぎることによって、ことが壊れるケースもよくある。

○Ｃ委員　　高齢者クラブの加入率２１％である。高齢者クラブでは会員増加に向けた取組を一生懸命やっているが、現状としては減っていく方が圧倒的に多い。
　我々がやろうとしていることが、果たして高齢者自身が欲していることなのか考えていく必要がある。高齢者が欲していることの幅は広く、例えば、６５歳くらいの

人は就労のニーズが高い。
　高齢者の活躍のために何を支援していくかは、幅広い高齢者のニーズを拾わないといけない。
　我々高齢者クラブも、ちょっとピントがずれているところがあるかと思っている。２１％以上に会員数を増やそうと思うと、全てをカバーすることはできないが、幅広いニーズがあるということを認識する必要がある。
　闇雲に前例に倣って、同じ行事を繰り返しやっていくのが、現在の大体のパターンだが、ニーズと合っていないという気がしてならない。

○Ｄ委員　労働組合の団体であるため、労働を中心にものを考える。
　昨今、定年が徐々に延びている。最近はそれに伴い、年金受給開始も先に延びていっている。
　他にも、企業での雇用延長を７０歳くらいまでにするという議論がスタートしている。６５歳に雇用延長したときにも、地域デビューが遅れていくという心配があったが、さらに５年遅れていくことになる。地域の担い手が少なくなってしまうという心配がある。
　労働者を守る立場としては、難しい時代を迎えている。体力・聴力・視力の衰えなど、若いころとは同じように働けない人も雇わなければならない企業側の難しさがある。賃金とのバランスをどうとるか、働く日数をどうするかなども考えなくてはならない。
　ニーズをマッチさせることも企業側には要求していかなければならない時代。年金受給開始が遅れていくと、高齢者の働きたいニーズは今より増していく。行政サイドには、企業が求める方と働きたい方のマッチング情報の提供が求められる。
　その上で、「高齢者」の定義、何歳から何歳までが高齢者としていくのか、今まで通りとしていくのか、もう少し目線を上げて議論していくのか。

●事務局　豊田市独自の定義は定める予定はない。今回の議論の中では、少し幅広に捉えたい。
　年齢的には高齢者でも、正規雇用で働いている人を現役と捉えるなら、そういった方に対して、正規雇用終了後の準備をしていくことが必要と言うことであれば、それも施策の一つとして考えられる。

○Ａ委員　年齢ではなく状態で見ているということでよいか。

●事務局　フルタイムで働く状況から、次の状況に変わったタイミングで、そのまま家にこもらず元気で活躍できるために、市として何ができるのか。その年齢になったときもそうだし、準備が必要ならその施策が必要と考えている。

○Ｄ委員　定年後というイメージか。正規雇用で６５歳や７０歳まで働くとすると、それ

以降の活躍の場や、その前からの準備について議論していきたいということか。

●事務局　６５歳以上を高齢者と言っても、時代は大きく変わってきている。様々な調査結果等からも、７５歳くらいまでは元気で活動している方が多いという実態がある。一方、社会の様々な制度が、高齢者を６５歳からとしているということもある。そういった中で、高齢者の定義をどこに置くかという話題は出ているが、明確な整理はできていない。

○Ｅ委員　年齢の議論は、先ほどＢ委員がおっしゃった地域によって異なることも関係があるのではないかと思う。年齢制限を決めて議論していくのがいいのか、年齢ではなく「状態」で考えていくほうがいいのか。こういうことをやってみたい人、年齢を重ねてきて準備段階にある人、現役で主婦や農業をやっているが社会貢献をしてみたい人等を含めて、かなり幅広にとらえていくということでは議論が進めにくいか。

○Ａ委員　豊田市の場合は、定年のある会社員のような方であれば、リタイアした後の生活といえるが、農業の方には定年がないので、生活が仕事という形で続いていく。

高齢者クラブではどこでも加入率が低下している。老人と呼ばれたくない人や、既存団体に入りたくない人、役員をやりたくない人など、既存のものは下がっていき、その他のところで違う生き方を模索している人も多くなっており、自分のライフスタイルを大事にしたいという意向が強くなっていることは分かっている。

その中で孤立していくという形が進んでしまっているが、本人たちもそれを良しとしているかというと、そうではない。

ただ、どうしていいかわからなくなっている状況の中でも、自分を認めてほしいということがとても強くなっていき、社会全体が不安定になってしまっている。

その中で、豊田市としては高齢者の活躍支援というときに、どのあたりにターゲットを置くのか。このあたりを焦点化して議論をしていくと、豊田市の高齢者の活躍支援の議論が進むのではないかというお考えがあれば。

○Ｆ委員　Ａ委員に整理していただいたように、新市域エリアの方たちと旧豊田市エリアの方と、そもそも生活スタイルが違う。

職業人だった方たちが、退職後にどうしていくかという危険性があるというのは、以前から言われていた。

そういった方たちに活躍してもらわないともったいないという議論がある。Ｄ委員の御発言にあったように、定年が伸びるという議論がある中で、定年が７０歳になった場合に、担い手となる人がいるのかどうか。役割の定年制をおいているところは７５歳であることが多いため、残り５年で役についてもらおうと思っても、なかなか推薦していけない状況もある。

しかし、社会が変わればそういうところも変わっていき、担い手として私たちが期待する人たちも幅が広くなっていく。

年金が収入源である人もいれば、ずっと働きたい人もいる。また、ライフスタイルが変わって、週 3 日働いて、それ以外の日は地域の中に参加している人もいるし、毎日のようにジムに通っている方もいらっしゃる。

行く場所はあっても、役割があるかどうかというところで、今、顕著に出ているのは、退職した方に役割がない方が多いのではということである。

例えば退職しても、畑を持っている方たちは、先祖代々の畑を継ぐというような居場所があるが、そうでない方は次に何をやったらいいのか。地域福祉計画・活動計画の立案時も、そういう人たちの憂いというものをターゲットにしていた。

○Ａ委員　企業退職者を基本的にターゲットにしながら、収入がいったん切れて、次の人生を考えなければいけない、探さないといけない方々を基本に置いたらどうかという御意見ということでよいか。

○Ｆ委員　絶対的にというわけではなく、フレキシブルに考えないといけないが、そういう人たちを地域にどうやって関わってもらうかということも考えなくてはいけないと思う。

○Ｇ委員　自分の親を介護していて、親の周りの高齢者の会話を聞いていると、高齢者クラブに楽しく参加していたが、健康を害しているわけではないのに、辞めていってしまって残念という声をよく聞く。

役が回ってくるのが嫌だとか、人間関係がうまくいかないなど、原因は色々あると思うが、全て高齢者クラブに解決を任せるのはいかがなものかと思う。良い方ばかりなのに、何かのきっかけで崩れてしまう。行政との関わりや地域の中などに、サポーター的な存在の人がいてアドバイスができれば、そういった集まりの場を大事にできるのではないかと思う。

あとは、「退職してから切り替える」というふうに考えると、うろたえる。知り合いの中でも、退職して何もやることがない夫を妻が誘導して、様々な活動の体験をして、やっと自分に合う活動を見つけるという例も多い。働いている最後の部分で、退職後のライフスタイルをイメージできるように、地域・会社ぐるみで先輩の体験談を聞くなど、何かヒントになることができないか。退職後の年金の手続きの説明会などがあるのは聞くが、そういったものだけでなく、自分にあったライフスタイルを本人が決められるようにサポートするのが行政だと思う。

○Ｈ委員　シルバー人材センターは６０歳から入会できるが、６５歳まで雇用されるようになったため、６５歳までにシルバーに加入する人はほとんどいない。６５歳で会社勤めが終わって、数年自由に過ごして、７０歳手前で入会する人が多い。そこから新しい仕事を覚えて、お客様のところに行くのは厳しくなってきた。

今まで会社でやってきた仕事と同じ仕事がシルバーにあるわけではないため、違う仕事にチャレンジしてもらわなければいけない。そのときに、何か手助けしてあげるような、新しい技能を学ぶチャンスは作ってあげたいと思う。違う分野にチャレ

ンジするステップを何か用意してあげたい。

シルバー加入率は１．９％。全国的にも２％位。残りの９８％は何をしているのかというところを疑問に思うが、やはりそれぞれなのだろうなと思う。

市民福祉大学は８１歳の方が参加してみえるとのことだが、シルバーの最高齢は９１歳。どこも悪くなくて草刈をやっている。そういう人も中にはいるが、シルバーは７５歳で辞める場合が多いことが動向として見られる。昔は６０歳くらいで入会して、２０年ほどシルバーに在籍していたが、今は７０歳で加入するため、在籍期間がとても短くなってきている。シルバーとしては、健康なら、なるべく長く在籍して仕事に就いてもらいたいため、会員年齢が高齢化していくなら、それに見合った仕事を用意しなければならない。

シルバーに訪ねてくる人の中に、来年から何かしようと前もって活動している人もいる。しかし相談するにも、あっちに行ったり、こっちに行ったりしなければならない。どこか１箇所で仕事もボランティアも遊びも相談できる居場所があれば良いと思う。

○Ａ委員　それは、相談に行ける場所としてか。

○Ｈ委員　そのとおり。

○Ｉ委員　私自身、定年退職後は１～２年は自由に過ごした。その後は向学心に燃えて高年大学、放送大学や八事の学習センターでゼミを受けたりと充実していた。今年になって人生の終盤に差し掛かったと感じ、社会の役に立ちたいという思いが沸いた。市の任用職員はことごとく不採用になったが、逆に意地でも就職してやると奮起し、今はホームセンターに勤務している。

個人差はあるが、何かやりたいと思うタイミングは誰だってある。その時にそんなに労力を使わなくても、必要な情報が得られる仕組みがあれば非常にありがたい。ボランティア、学習等、かなりエネルギーを使わないと情報が見つけられない。包括的に一括で情報を与えてくれるところがあれば非常にありがたい。

シルバー人材センターにも行ったが、適職が見つからず入会を断念した。先輩・同僚も、何かやりたいと思っている。そういう情報は、６５歳、７０歳になってから探そうとしても難しい。もっと前もってわかるようになるとさらによい。企業の定年前説明会ではそこまで踏み込んでいない。

○Ａ委員　例えば、資料が置いてあって自分で調べるより、相談できた方がいいか。

○Ｉ委員　気軽に相談できる、話が聞ける場があればいい。交流館に行っても資料は山ほどあるが、そこから自分が思うようなものを探せない。資料より話せる方がよい。

○Ａ委員　例えば、交流館にそういう人が１人くらいいて相談できたら良いと思うか。

○Ｉ委員　　そうですね。

○Ａ委員　　区長会の活動などで大きな変化などはあるか。

○Ｊ委員　　区長会ではあまり話題になっていない。

個人的に感じているのは、発明クラブのことである。定員がすごく少なく、１回入るとやめないので、新しく入りたい人が入れない。例えばそういったものを、全員入れるように大きな規模にすれば、指導者も必要になり、たくさんの活躍の場ができるのではないか。

地域学校共働本部なども土曜学習などをやっており、そういったところも高齢者の活躍の場になるのではないか。そういった活躍の場がたくさんできるといいと思う。今あるものを少し充実できるようなかたちにつなげられるといい。

個人的には退職したら何か講座に参加してみたいと思ったが、探すのがなかなか大変だった。広報も文字が小さく、交流館もチラシがたくさんあるが探しにくい。

自分の地域では、夏休みに小中学生に勉強を教えている。夏休み以降に中学３年生に教えている学習指導のボランティアや、早朝の学校が始まる前の子どもの預かりボランティア、授業の中に入ってついていけない子どもの面倒を見るような指導ボランティアを実施している。受け入れる側の調整も必要だと思うが、そういったものができるといい。

○Ａ委員　　高齢者だけでなくて、もう少し前からという御意見と、もう少し多世代で考えるべき、子どもとどう関わるか、次の世代を育成していくかという中で、高齢者の活躍の場を検討するのがいいのではないかという御意見だった。

○Ｊ委員　　活躍の場はたくさんあった方が良い。子どもとの関わりは新鮮に感じる。

○Ｇ委員　　図書のボランティアをしているがメンバーは４０代から７０代である。かつては２０代の方もいて、夏休みの時には中学生のボランティアの生徒も一緒になって活動している。世代が違う人と関われる魅力というのを、高齢の人ほど感じているというのを実体験として持っている。できるだけ誰でも出来て、いつまでも続けられる内容のボランティア活動をしたいと模索しながら進めている。

地域の中で、高齢になる前の人たちも末永くつながっていければいいと思う。高齢者を敬う意識や大事にする意識を私たち世代は考えるべきだと思う。そういったことを日頃から言える場、交流の場があればいい。

ボランティア同士が横にもつながって、雑談の中でも悩み事なども話しながら、ヒントを得られるような場も必要なのではと思う。

○Ａ委員　　豊田市では、豊田市型のコミュニティスクールの全市展開に向けて動いている。地域と学校が共働して、子どもたちを育成していこうという仕組みである。学

校に関わりながら、子どもたちが地域に出ていきながら、地域の方々で子どもたちを育てようという仕組みは全国的に進められている。色々な方が子どもに関わりながら、次の世代をきちんと育成していくという流れである。

審議会の議論のテーマは高齢者の活躍支援ではあるが、高齢者だけに限らず、豊田市のあり方としてどうするのか。高齢者の活躍を支援しなければならないという議論になるのか、高齢者の方が持っている知恵や技術を伝えながら、このまちを次世代に継承していくために行政としてどうしていくのか、という議論になるのかで方向性が変わると思うがどうか。

○Ｋ委員　「高齢者だから」という枠を作ってしまうと、そこからはみ出した時に居場所がなくなる。高齢者を「好齢者」と言えないか。６５歳以上だから高齢者と言うのではなく、自分で何かしたい人、あれやりたいこれやりたいという人をたくさん作って、最後は「幸齢者」になりましょうというように高齢者を明るく、前向きにとらえたい。

○Ｅ委員　前年度の議論でもあったが、豊田市には市民活動センターがあり、市民活動を支援している隣にヤングオールドサポートセンターがあるという状況だった。今年度、一本化したのは、高齢者も市民なのだから市民活動センターが一本化して支援するべきではという議論であった。

そういった考え方もあるが、高齢者に特化した集中的な議論がしにくいということもあり、市民活動センターに一本化するのはまだ早いという面もあったかと思う。したがって、方向性としては、高齢者から子どもまで豊田市民が活躍の場を見つけられるよう支援していこうという流れはいいと思うが、審議会で集中的に議論する焦点というのは高齢者に特化して議論をしていくという方向性でいいと思う。

○Ａ委員　高齢者を問題視するのではなく、高齢者の生きがいづくり、生きがいと言った時に、次の世代に渡していくのにどうしたらいいかという観点になるのだと思う。

高齢社会というと、高齢者だけの社会というイメージになってしまい、重い感じ、出口がないような議論になってしまう。高齢の方が増えていく社会ではあるが、多世代が生きている中で、どういった未来の社会を作っていくかというようなことを片隅に置きながら、高齢の方がどう活躍できるのかという議論になってくると思う。そのあたり、少し観点が変わってくると思う。

○Ｃ委員　色々な行事に出る人はみんな同じ人。そういう人は、自分で機会や情報を探せる人だと思う。そういう人は、いいヒントがあれば飛びつく。それ以外の出てこない人を対象にするのかという点はどうか。出てこない人も対象にするとなると、議論の方向性も変わってくると思うが。

●事務局　嫌な人を無理やり連れてくるようなイメージは持っていない。ヒアリング等から何らかしたい、何か役に立ちたいと思っている人、一歩踏み出せない人がいるという

のが分かってきている。その人にうまく一歩踏み出してもらえるような支援ができないかと思っている。

ボランティアでやりがいや、お小遣い程度の収入につながるような就労を望んでいる人もいる。思っているけど動けない人をうまく繋げられるように。

○Ａ委員　気持ちはあるけど出られない人にどうするのかというところである。

○Ｃ委員　そういう人で活躍している人をつくっていくということで議論を進めるならよい。

○Ｂ委員　世の中に関わりたくない高齢者がいたり、家族との人間関係も変わってきている。地域で寂しい思いをしている人もいる。この審議会でなくてもいいので、豊田市としてもその部分を考えてほしい。

○Ａ委員　１１月１６日に文科省の組織再編があり、社会教育が消えた。生涯学習課が残っただけで、局はなくなった。社会教育施設を別の形でも活用できないかということが背景にある。その理由の一つに８０５０問題があり、これは８０代の親の年金に４０～５０代の団塊ジュニアの世代がぶら下がっている状態のことである。今、４０～５０代の引きこもりが増えている。その親が亡くなったり、認知症になった時に、この４０～５０代をどう社会につなぎとめるかという議論が出てきており、従来の社会教育施設と福祉をどう結び付けるかという議論をしなければいけなくなっている。その世代の方々に、どのように社会との関わりを作ってもらいながら、行政の支援が届かない状態にしないかということを問われている面がある。

そういった中で、従来の社会教育や生涯学習が教育委員会マターではなく、教育的には使うが、社会に出てきてもらいながら、福祉的な機能を高めていくという議論をしなければならなくなっている。そういった意味で、豊田市は生涯活躍部ができて、横断的にやる組織を作ったことは良い事だと感じる。従来の縦割りではなく、横につなげていけるような施策が必要である。

学校教育についても、学校教育に関わる地域の方が増えていくのは、学校も歓迎している。その中で、子どもたちへの教育の仕方を変えていくということが市としてもあるはずである。そこに、高齢者や思いのある人が関わっていく中で、先ほど鈴木委員がおっしゃったように、発明クラブが１か所ではなくあちこちにあり、いろいろな方が自分の経験を子どもたちに伝えながら、活躍できる場所があってもいいのではないか。そこで子どもたちも育ってくれればいいのではないか。

日本の子どもたちは、世界で一番高齢者を尊敬していないということが、統計上分かっている。その理由は、日頃から高齢者と触れ合っておらず、知らないからである。そういった意味では、子どもたちと高齢者が関わる環境を作っていきながら、世代間が対立するのではなく、良い関係を作って次の世代へ引き継いでいく環境が作れないかと思う。そういったことを踏まえ、今までの議論をまとめながら、

審議会で議論をしていくべきこと、高齢者の活躍のための支援の仕方をどうしていくかということを共有できればと思う。

○Ｈ委員　一億総活躍と言われており、シルバーにも直結する話である。働ける人は働くということであるが、実態は、フルで働きたい、担い手になりたいという人は少ない。「活躍しなさい」ということを前面に出すのではなく、やりたいことが実現できるような支援をして、結果的に活躍になっているという考え方であれば良い。

○Ａ委員　人生１００年構想会議という国の会議の答申では、ライフステージ論が議題になったが、みんな同じような生活をするのではなく、マルチステージであり、ステージを乗り換えていくことができる、様々な活躍ができる場所が持てる社会を作っていくという内容である。その際に必要なのは「学び直し」であるとしている。「自分がしたい生活を送れるように支援していく」ことが必要である。

鈴木委員がおっしゃられたように、「活躍しなさい」ではなく、活躍できる場がたくさんあり、自分で求めればできるという形が必要だと思う。

○Ｄ委員　この近隣の地域は人手不足で大変困っている。特に中小企業は、人手不足に加え、後継者不足が課題であり、事業をたたむようなケースも数多くある。高齢者・女性・外国人の働き手がほしいという状況下になっている。県も国に、今まで認められていた職種以外に外国人労働者を雇えるよう特区として認めてもらうよう申請を出している。

そういったように、来て働いてもらう分にはいいが、家族ともどもその地に住んで、そこでコミュニティができ、あるいはそこで外国人の高齢者が誕生していく。豊田市でも保見地区では以前から外国人が住んでいる地域があるが、これから、もっとそういった課題が増えていくのではないか。

「定年」という考え方は、わずか数十年に根付いた考え方であり、昔は定年という考え方はなかったということをおっしゃる方もいる。「定年」という概念がない時代が、いずれまたやってくるかもしれない。そういうことも含めながら、年配の方と若手、地域、仕事の全体を俯瞰しながら、行政としてどこをサポートすべきかを考えていくべきだと思う。放っておいても幸せな高齢者もたくさんいらっしゃる。特にこの地域はそういう人も多いと思う。どういった層にターゲットを絞るのかというところも、審議会として考えていくべき。

○Ａ委員　平成の不況で定年後の再雇用がなくなって、６０歳で辞めるということになっていたと思うが、今はどうか。

○Ｄ委員　今も再雇用はある。一時はリーマンショックで人件費削減をしたが、最近はまた回復してきているので、定年後に再雇用で下請け企業を転々としている方もいる。しかし、再雇用を望まない人もいて、ある程度、老後の資金はあるため、あえ

て働く場を求めずにリタイアする人もいる。その結果、働き手が不足するという状況だと思う。

〇Ａ委員　この審議会での議論の方向性として、以下をイメージする。

活躍を強制しないが、求めればいろいろな形で活躍できる場所があること、情報が得られることや、どうすれば良いかわからない人に、早めに将来の人生の楽しみになるような情報を提供しながら、自分なりに動機づけをしてもらい、自分自身で、将来のイメージを描いて一歩を踏み出してもらえるような支援を考えていく。

その時には、高齢者の活躍支援だけれども、高齢者だけでなく多世代で色んな関わりを持って活躍できるような仕組み。多世代交流や子どもたちとの関わりの窓口を増やしていくという方向で考えていきたい。

○Ｅ委員　高齢者のイメージについてだが、シニアアカデミーで講師をしているため、一口で高齢者といっても様々レベルがあると感じている。リーダーシップを取れるような人や個人の生きがいを求める人までいろいろな人がいる。

この社会をどう動かしていくかというところで、全体の底上げではなく、この方向性を担う高齢者の人たちを豊田で育成できないかと考えている。そういったリーダーシップを持って引っ張っていく人たちが足りないのではないかと思っている。せっかくシニアアカデミーで学び、経験をし、交流館でのつながりを持ち始めているが、そういう方たちをどういう方向性でひっぱっていくかという部分のアイディアが足りないと思う。

一歩進んで、地域活動のリーダーシップを発揮できる高齢者を支援する仕組みができないか。

○Ａ委員　豊田市をどうするかという議論に踏み込んでいかなければならず、難しいのではないか。

○Ｅ委員　方向性は第８次総合計画で出ているが、それでは難しいか。

○Ａ委員　引っ張っていく人を育成するには、ある程度のイメージを共有しなければならない。シニアリーダーのような形で、地域で人々を引っ張っていくようなコーディネーターのような人を育成していくのか。行政としても、定めにくいところではあると思う。

それに関連して、従来の社会教育主事という任用資格が２０２０年位に社会教育士という仕組みに変わる。その大きな目的は地域に入り込みながら、地域の人と対話をして、様々な学びをオーガナイズして、地域の人が自分なりの生き方ができるよう支援をしていくことにある。例えば、企業で働いている社会教育士が、地域のニーズを拾い上げながら、地域の企業の経営に反映させることができるような仕組みにしていくことが狙い。大学で社会教育士の養成が求められている。

○Ｅ委員　資格を持つ人たちの質を保証しようとすると、大学で一定のプログラムを受けていただく必要があるということ。

○Ａ委員　Ｅ委員の意見は、もう少し地域のリーダー的な人を育成すべきではと言う内容であるが、他の委員はどうか。

第８次総合計画の基本方針も、「つながる　つくる　くらし楽しむまちとよた」である。人々をつなげていく人をたくさん育成し、新しい社会をつくりあげていくことが楽しいと感じる豊田市にしようということである。

高齢者の活躍支援であるが、皆が自ら活躍できていると思えるような、もっとやってみようと思えるような社会をイメージしている。達成感があり、次もやりたくなる関係づくり、それができる行政的な支援をどうするか。

○Ｆ委員　Ｅ委員がおっしゃっていたようにリーダー、コーディネーターを作るものも必要。一方で、すでに区長会等のリーダーもいる。それでもなかなかうまくいかないという面もある。

やはり、リーダーに協力するためのボトムアップも必要であり、課題に対して、互いにうなづきあえる仲間づくりなどの両方が必要ではないか。そういう人がいないと、リーダーの疲弊感にもつながっていく。仲間うちでも、共通の思いを言い合える仲間を育成することも必要だと思っている。

○Ｊ委員　小学校が移転するときに、地域コーディネーターを置くという話がでた。そういった専門の職員をおけばできるのでは。そういう身分にしないと集中できない。

○Ｆ委員　地域コーディネーターは市民福祉大学の卒業生がやっているケースがある。肩書がつけば地域でも活動しやすい。

○Ａ委員　今日の議論で、方向性が見えてきた。

もう一点、この場でなくても良いが、豊田市として考えていただきたいこととして、子どもの貧困の問題がある。日本は非常に深刻であり、ＯＥＣＤ諸国の中で最低レベルである。子どもの貧困は学力にも関わっている。さらにそこに人工知能の問題が関わってくる中で、ホワイトカラー層の８割が人工知能に代替され失業者が増えると言われている。その問題と子どもの貧困、学力の問題、読解力のなさが問題になっていて、その中でも政策として、貧困問題をどう解決していくかが大きな問題となっている。このことについて、自治体としてどうしていくのかを考え、どのように将来の安定社会を作っていくのかということは、高齢者の活躍にも関係してくるだろう。子どもたちが肯定感を持てる社会についても、次回以降取り上げられればと思う。